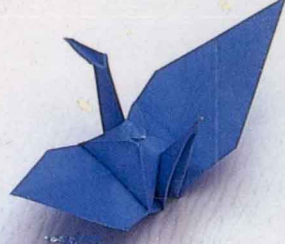


小筆字の美しい書き方

やさしく学ぶ細字の基本

本間伯亭 著





《著者紹介》

ほんま はくてい
本間伯亭(本名・良枝)

日展 昭和47年初入選(かな) 以後14回入選

毎日書道展 秀作賞2回 毎日賞1回

読売展 読売新聞社賞(かな)

日展会友、読売書法展理事、日本かな書道会正
会員、日本書芸院一科審査会員、謙慎書道会理
事、寒玉書道会常任総務

小筆字の美しい書き方

著 者 本 間 伯 亭

発 行 者 富 永 弘 一

印 刷 所 公 和 印 刷 株 式 会 社

発行所 東京都台東区 株式会社 新星出版社
台東4丁目7

郵便番号110 電話(3831)0743 振替00140 1-72233

©Hakutei Honma

Printed in Japan

ISBN4-405-05540-8

小筆字の美しい書き方

やさしく学ぶ細字の基本

本間伯亭

新星出版社

●はじめに

ワープロの出現で、文字を書くことも少なくなりました。手軽に、きれいで読みやすい文字の文章がつづれるわけですから、こんな結構なことはありません。しかし、その一方で、手書きの味わいが失われたことを憂える人がいることも事実です。

書く文字は、どんな上手に書いても、十人十色の個性が出ます。その個性は、その人の心のぬくもりを感じさせます。とかく最近はこの心のぬくもりを欠いた人間疎外が問題視されていますから、文字を書くことの必要性も、ぜひ知っていただきたいと思います。

毛筆がかつてのように、日常的に用いられることは、もうないでしょう。だからといって狭い書道の世界で生き続けるだけとはかぎりません。毛筆の実用的な価値には、文化の裏付けがあるからです。年賀状やのし袋の表書きなど、毛筆でなければ味わえない趣が、そこに様式化され、生かされています。

手紙やはがきの表書きにしても、あらためて書くときは、毛筆を用いるという人が多いようです。しかしいきなり毛筆で書いても、なかなかうまくは書けるものではありません。実用的な文字を上手に書くのは、素質ではなく、練習の仕方です。きちんとした練習さえすれば、字は上手に書けるのです。

本書は、広い書道のジャンルの中で、一番基本ともいえる小筆文字の書き方にその的を絞り、筆使いの初歩からわかりやすく解説してあります。はじめて筆を持つ人でも、安心して練習ができるよう、親しみやすい入門書を心がけました。本書が、多くの皆様のお役に立てますよう、心から願っております。

著者

はじめに

筆の持ち方と書き方

筆・墨・硯

楷書の筆の運び

永字八法

楷書の基本点画

行書の基本点画

文字の美しい形

扁と旁のバランス

冠と脚のバランス

扁・旁・冠・脚の変化

間違いやすい接点

楷書と行書で筆順のかわるもの

ひらがなを書く

連綿の流れ

漢字かなまじり

6

7

8

9

10

27

44

51

54

57

62

64

66

70

72



カタカナを書く・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・74

都道府県、市区町村名・・・・・・・・・・・・・・・・78

都道府県名・・・・・・・・・・・・・・・・78

市区町村名・・・・・・・・・・・・・・・・82

人名・・・・・・・・・・・・・・・・90

はがき・封筒の表書き・裏書き・・・・・・・・96

はがきの宛名書き・・・・・・・・96

和封筒の表書き・裏書き・・・・・・・・99

洋封筒の表書き・裏書き・・・・・・・・102

のし袋の表書き・・・・・・・・104

慶事用・・・・・・・・104

弔事用・・・・・・・・107

のし袋の表書き(楷書)・・・・・・・・108

のし袋の表書き(行書)・・・・・・・・110

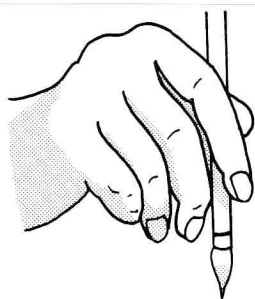
その他の表書き・・・・・・・・112

常用漢字表(抜粋)・・・・・・・・113

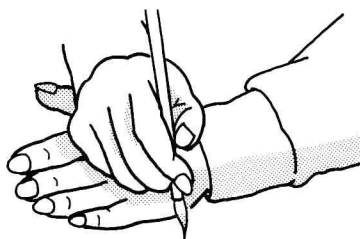
筆の持ち方と書き方

筆の持ち方には、**単鉤法**と**双鉤法**があります。単鉤法は筆の軸を、親指は内側から、人差し指は外側からかけるようにして持ち、中指で支える持ち方です。双鉤法は筆の軸に外側からかける指が人差し指と中指の二本になります。小字（細字）に適した持ち方は単鉤法です。

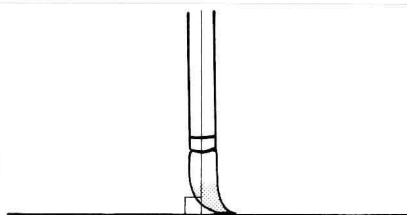
文字を書く場合の手の構え方（**腕法**）は、**提腕法**、**枕腕法**、**懸腕法**の三種類です。提腕法は右手の手首を軽く机につけて書く方法です。枕腕法は右手の手首を左手の上において書く方法です。この二つの方法は小字を書くのに向いていますが、



単 鉤 法

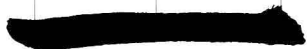


枕 腕 法



直 筆 法

起(始)筆 送 筆 終(収)筆



点

画（線）

用筆の名称

手首を机から離して書く懸腕法は小字向きではありません。筆の用い方も、**直筆法**と**側筆法**の二つがありますが、小字には紙に向かって筆を直角に立てる直筆法が適しています。また、書道ではよく点画という言葉を使いますが、点は文字通り「点」で、画というのは「線」をいいます。そして書き起こす初めての筆を「**起筆**（始筆）」、途中の筆の運びを「**送筆**」、最後の「**止め**」はね「**払い**」で終わるところを「**終筆**（収筆）」と呼んでいます。

筆・墨・硯

筆

筆はその穂先の長さによって、長鋒、中鋒、短鋒に分けられます。また毛の硬軟によって、剛毛筆、兼毫筆、柔毛筆に分けられ、兼毫筆は中間の硬さです。

小字の筆は、硬毛の固めた筆を用い、半分から三分の一をおろして使います。使用後は硯に水をたらし、使った部分の墨気を取り、布などで穂先をととのえます。

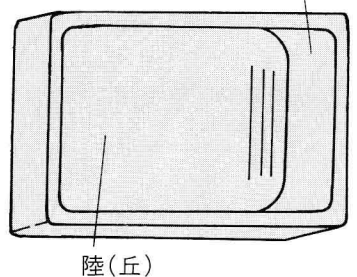
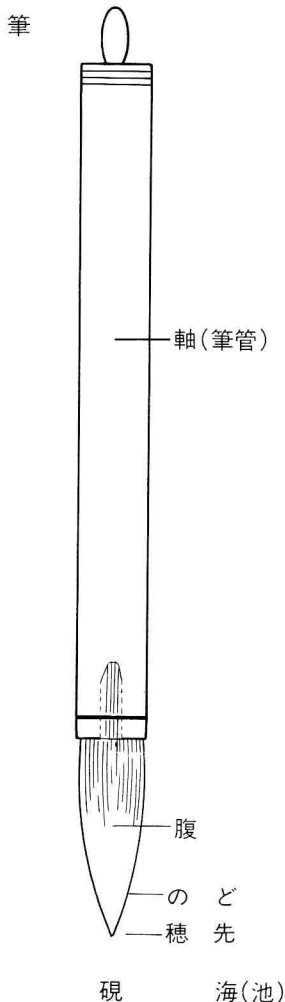
墨

墨には和墨と唐墨があり、簡単にいえば、和墨は日本製、唐墨は中国製の墨ということになります。しかし、中には唐墨は唐代のものにかぎると、こだわる人もいます。また墨は、その製法によって、油煙墨、松煙墨に分けられます。

和墨は、つやのいい黒い字が書けますので、細字を書くのに適しています。

硯

硯は材質によって、石硯、木硯などに分けられますが、中国産の端溪硯、歙州硯、澄泥硯、羅紋硯などがよく知られています。日本で硯になる石は、赤間石、玄昌石、竜溪石、雨畑石などがあります。硯を購入する時は、専門店を選ぶとよいでしょう。使用後は毎回洗浄し、たまには硯用砥石で硯面を軽くといで下さい。

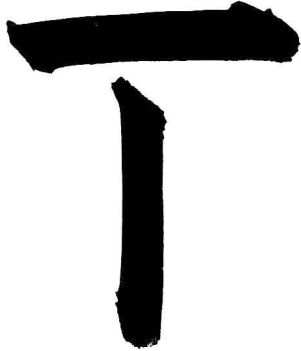
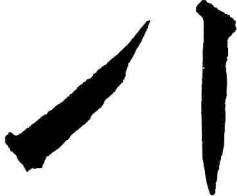
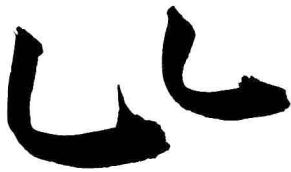


楷書の筆の運び

筆で書く文字の美しさは、線の表情と形です。しかし、一筆で線と形を整えて書くことは、そう簡単ではありません。緊張して構えると、かえって線が曲がったりします。それで、自分は字を書くのがへただと思い込んでしまいうのです。

自分の気持ちや考えだけで書いてもうまく書けるはずがありません。習うより慣れろで、あれこれ思い悩むよりも、まず書いてみることです。いろいろな書き方をして、書き込んでいけば、必ず美しい線が書けるようになります。筆の基本は、筆先を左上45度に打ちこみ、紙の抵抗に負けないよう力をゆるめず運筆することです。打ちこみ方は、たて画も横画も同じです。

書道用語の始(起)筆、送筆、終(収)筆、止め、はね、払い、反りといった言葉も覚えておいてください。

			払 い
			右払い・左払い 曲がり
			止 め
			は ね

永字八法



文字を書く基本の技法として、よく「永字八法」が引きあいに出されます。「永」という文字には、書の点画のほとんどがそなわっているからです。

もちろん、細かいことをいえば、ほかにもいろいろありますが、それは、自分で文字を実際に書いて理解していかないと、何の役にも立ちません。

永字八法は、それぞれの点画が、自然物になぞらえて次のように説明されています。

- ① 側…点。鳥の翻然として側下するが如し。
- ② 勒…横線。勒馬の韁を用うるが如し。
- ③ 弩…たて線。力を用うるなり。
- ④ 趯…はね。跳る貌にして、躍るに同じ。
- ⑤ 策…短い右払い。策馬に鞭を用うるが如し。
- ⑥ 掠…左払い。篋にて髪を掠めるが如し。
- ⑦ 啄…短い左払い。鳥が物を啄むが如し。
- ⑧ 磔…右払い。牲を裂く、これを磔という。

自然物のたとえは、智永（隋代の書家）の、八法論にあるものです。

楷書の基本点画

書法の点画の変化は、ほとんど無限にあるといってよいでしょう。『永字八法』はよく知られた基本の筆法ですが、ほかにも三二法、七二法など書法の流儀、流派は数かぎりなくあります。しかし、それらも結局、たて画と横画の二つに集中されます。横画には俯勢と仰勢がありますし、たて画には向勢と背勢があります。つまり単純な一本の線だけではないということです。

毛筆の文字は、単に形が美しいだけでは、見なれてくると

横画

始筆は45度で入り力をゆるめず通ふ

少し上に反らす

半分に引く

少し下向きに反らす

終筆は下側にこぶができないように
にぶつくばと押し戻す

生主 五王

もの足りなさを感じるようになります。筆の運びの遅速などによって表現される趣は、どこか心の安らぎを覚えます。むずかしい理屈はさておいて、とにかく簡単なものから始めて、まず基本をマスターすることです。そして、線を書くむずかしさや形のとり方のむずかしさがわかってくれば、それだけ進歩したことになります。何ごとも、一足とびに上達することはありません。上達のノウハウは、確実な歩みの中にあるのです。

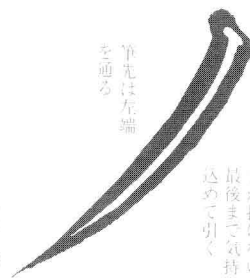
			
たて画 始筆はゆつゝくりと右度へ入れ、そのまゝ力をゆるめず、真下に運ぶ。  終筆は筆を押し戻すように止める。	たて画 払い 始筆は右度へ入り、力をゆるめず、真下に運ぶ。  払うときは、筆をゆつゝゆるめる。		
不 伝	下 未	千 牛	十 川



始筆は45度

力をゆるめないで
下に筆を通ふ

気持ちを含めて
筆をゆっくり上げる



始筆は45度

筆先は左端
を通る

力が抜けないよう
最後まで気持ちを
込めて引く

終筆は筆をゆっくり
上げる

月

赤

夫

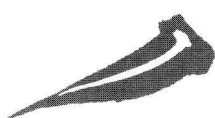
友

丹

所

木

火



始筆は45度

力をゆるめずに、斜めよりやや横に払う



始筆は45度

筆先は左端を通る

力をゆるめずに安定させて払う

斥

手

生

久

稚

我

鉄

分

たて画からのね

始筆は45度

力をゆるめずに引く



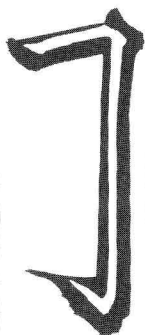
はねるときは左側に三角形をつくる気持で、筆をゆつりとはじき出す
角度はたて、曲に付て直角に

横画から折れたたて画のはね

折れるところで、

横筆を止め、そのままだに運ぶ

力をぬかずに引く



始筆は45度

たて画は対して直角にはじき出す
筆先の方角を少し右に向けるようにしてはねることをねいしてさる

丁

小

少

寺

円

関

門

扇



最後まで、気持ち
込めて筆をゆつく
り上げていく



右下から斜め
右上に抜く

筆先を
安定させる

起筆は箱度

力をぬかす
に引く



起筆は箱度

横画から右下へおさ
えこから抜く
方向に注意する

筆先を安定させ
てから抜くよう
にする

技

打

穴

写

冷

次

冠

安